

# ふるさと Something NEWS

第26回

## 伝統が、未来をつくる

### ——出羽三山山伏勧進祈願祭にみる

一般社団法人 光楓座  
一般社団法人 e f c o . j p  
代表理事 佐藤 建吉

#### ▼明治記念館での 勧進祈願祭

毎年恒例の「大江戸山伏勧進大祈願会」が、2020年2月4日に、元赤坂の明治記念館で行われた。それは、筆者の故郷の鶴岡市にある出羽三山神社が今年で42回目となる東京での行事である。筆者は、今回が3回目の参加であるが、会場の「富士の間」には、400名もの参加者が集つた。行事開始の午前11時に遅れて会場に到着した。その中央壁面に掲げられた大きな横断幕と、その下の祭壇と舞台、そして左右に居並ぶ山伏や巫女(神子)の装束の者たちから、祈願祭の荘厳さを感じた。席に着くと、司の祝詞に合わせ参加者も誦誦していることに気が付いた。さらに、参加者は胸から肩に頭襟(とぎん)という飾りをしていたので、自分も真似て着けた…。

以下、この勧進祈願祭の参加者としての感想と地域社会の持続可能な未来について述べたい。

#### ▼祈願之部

この行事は、二部構成である。午前11時からの「祈願之部」は、法螺貝を吹いての大先達・山伏・神子の入堂から始まる。祭壇のある舞台で、祈願祭の儀式が行われる。祭壇に大先達が一拜から始まり、献饌という瓶子(神酒徳利)と水器の蓋を儀式が行われる。続いて、祈願であり、三語拝辞・三山祝辞・三山排詞が、大先達とともに行われる。筆者が、席に着いた時には、三山排辞の途中であった。初めの「三語拝辞」は、次の三行の修法の文を唱えることである。

一 番目の「三山祝辞」は、月山大神、羽黒山大神、湯殿山大神の歴史や縁起、この三山の東北地方への広まり、関東地方への広まり、さらには日本全国への広まりと利益を書き留めている。例えば、次のようである。

綾に綾に高く尊と奉る  
三山神の御前を拝み奉る

この蜂子こそが、第32代崇峻天皇の皇子・蜂子皇子、その人である。いまから約1425年前の推古元年(593年)、遠く奈良の都からはるばる日本海の荒波を乗り越えて一人の皇子がおいでになられたという。出羽三山神社では、この時を以て「御開山の年」とし、蜂子皇子を「御開祖」と定め、篤く敬仰している(出羽三山神社HPから引用)。

二番目の「奉祝之部」は、神事ではあるが、一転して文字通り奉納の芸能披露となった。これが、本コラムの主題である。最初に長唄「七福神」が、花柳寿々美緒氏によって舞われた。はつきり書くと、人材不足の巫女舞の出来栄に比べて、花柳流師範の舞は、華麗で妙技である。

次は、若い演者の千代園剛氏の和太鼓と雅勝氏の津軽三味線の協演であり、「風神雷神」は、筆者の関心曲でもあった。二人の太鼓と三味線のセッションは、館内(実は室内である)に共鳴した。和太鼓の千代園氏は、男性的な風貌で山伏でもある。同氏のチラシに書かれている音魂

は、波動として蜂子にパワーを与えてくれる。一方、雅勝氏の三味線は、そのバチ裁きは、綾に綾に奇(くす)しくの精緻さがあり、二人のセッションは、現代日本人に大きな刺激と共感を与えた。三番目の奉納は、笛とタブラの合奏である。笛は、一噌幸弘氏、タブラは吉見征樹氏である。一噌氏は、安土桃山時代から続く能楽一噌流笛方の名手である。海外公演もしている。タブラは北イックが、『紅花慕情』と『雪割り酒』を歌い、会場を和ませた。

その後の次第の宮司挨拶で、宮野野司は、予想外の演奏の感動に、令和の子供たちの未来に繋げるものと述べた。私も同感で日本の伝統芸能を世界の音曲との融合を許容した。出羽三山神社の今日の演出を高く評価したい。

大幅に時間が延びて祝宴となったが、出羽三山で巫女をしていた平成3年生まれ歌手・羽山みずき(サンミュージック)が、『紅花慕情』と『雪割り酒』を歌い、会場を和ませた。



和太鼓と津軽三味線の演奏

三番目の奉納は、笛とタブラの合奏である。笛は、一噌幸弘氏、タブラは吉見征樹氏である。一噌氏は、安土桃山時代から続く能楽一噌流笛方の名手である。海外公演もしている。タブラは北イックが、『紅花慕情』と『雪割り酒』を歌い、会場を和ませた。

出羽三山は、1400年も続いているが、その長い歴史の中で必要なのは時代と調和し、さらに新鮮な革新を行うことである。事実、出羽三山は、前述のように、蜂子皇子を物語とした自然崇拜の山岳信仰であった。それは、山伏としての修験道を実践するものである。

これまでの悠久の歴史の中で多くの変遷を経験して、「信ずること」をつないで、人々の広く篤い信仰に支えられて、現在に至っている。大勧進祈願祭の、「コマは、伝統を未来へ継続するための自然な誇り高い形振りであった。これに倣うと、持続可能なやSGDs」などは、そうした空気感あふれる土壌を持つことであると気づかされる。

#### 大勧進祈願祭の会場風景(明治記念館)



もうもろの罪穢(けが)れを祓(はら)い裸(みそぎ)て清々(すがすが)し  
遠い神笑み給え穢

これらの文章は、当口、宮司の宮野直生氏に直接聞いた。国学者だった初代宮司の西川素直氏が年数を掛け修文したという。口語体にするべく、約1200文字の文章で

この蜂子こそが、第32代崇峻天皇の皇子・蜂子皇子、その人である。いまから約1425年前の推古元年(593年)、遠く奈良の都からはるばる日本海の荒波を乗り越えて一人の皇子がおいでになられたという。出羽三山神社では、この時を以て「御開山の年」とし、蜂子皇子を「御開祖」と定め、篤く敬仰している(出羽三山神社HPから引用)。

この蜂子こそが、第32代崇峻天皇の皇子・蜂子皇子、その人である。いまから約1425年前の推古元年(593年)、遠く奈良の都からはるばる日本海の荒波を乗り越えて一人の皇子がおいでになられたという。出羽三山神社では、この時を以て「御開山の年」とし、蜂子皇子を「御開祖」と定め、篤く敬仰している(出羽三山神社HPから引用)。

この蜂子こそが、第32代崇峻天皇の皇子・蜂子皇子、その人である。いまから約1425年前の推古元年(593年)、遠く奈良の都からはるばる日本海の荒波を乗り越えて一人の皇子がおいでになられたという。出羽三山神社では、この時を以て「御開山の年」とし、蜂子皇子を「御開祖」と定め、篤く敬仰している(出羽三山神社HPから引用)。

この蜂子こそが、第32代崇峻天皇の皇子・蜂子皇子、その人である。いまから約1425年前の推古元年(593年)、遠く奈良の都からはるばる日本海の荒波を乗り越えて一人の皇子がおいでになられたという。出羽三山神社では、この時を以て「御開山の年」とし、蜂子皇子を「御開祖」と定め、篤く敬仰している(出羽三山神社HPから引用)。

この蜂子こそが、第32代崇峻天皇の皇子・蜂子皇子、その人である。いまから約1425年前の推古元年(593年)、遠く奈良の都からはるばる日本海の荒波を乗り越えて一人の皇子がおいでになられたという。出羽三山神社では、この時を以て「御開山の年」とし、蜂子皇子を「御開祖」と定め、篤く敬仰している(出羽三山神社HPから引用)。

この蜂子こそが、第32代崇峻天皇の皇子・蜂子皇子、その人である。いまから約1425年前の推古元年(593年)、遠く奈良の都からはるばる日本海の荒波を乗り越えて一人の皇子がおいでになられたという。出羽三山神社では、この時を以て「御開山の年」とし、蜂子皇子を「御開祖」と定め、篤く敬仰している(出羽三山神社HPから引用)。

連載・イベント



笛とタブラの演奏